

浅科村文化財調査報告 第2集

矢 嶋 城 跡

—緊急発掘調査報告書—

1985

浅科村教育委員会

序

私たちの現実の生活を地域の社会関係・社会活動・条件等を通し歴史的発展の姿としてみると、その地域社会の過去にさかのぼって、そこに展開された人間関係・社会生活・人間性等を知り、これを基礎にして現実の社会生活上の問題を解決すべきである。

身近な生活環境、すなわち郷土の実態とその発展の姿を正しく認識しなければならぬ。そこで、郷土の事象を歴史学の立場から学問的に研究を進める。

○中世（室町期）の山城としての、城郭の跡が歴然と残存し、築城のたくみさ、武士が支配する封建社会の地方の姿を物語る資料となる。

○…… 木曾義仲が小県依田城出兵（治承4年・1180年）源平盛衰記・承久記等中世武士団の動きを物語る資料となる。

また矢嶋城跡は、今日、近代産業の発展の中で、置き去られ畑地（耕地）としての手入れが不十分で放置され、荒廃が進み、ここ数年来の大雨と冬期間における凍上りにより崩落が激しく今後、城跡の原形を保つことが困難な状況におかれている。

佐久郡下の山城は、その数60有余ヶ所にのぼるが、今や消滅寸前の状態におかれている。

その中で、矢嶋城跡は（地形的に舌状台地利用の場合、梯郭式の築城が一般的である）輪郭方式を取り入れた特色をもっている。

このような矢嶋城跡は、私たち祖先が残した貴重な遺産であり本調査によって、郷土の歴史と文化の歩みを一層身近に知ることができ、この遺産が、現代の中に更に新しい文化を創造することは、現代社会に生を享ける私たちの責務である。

地域住民を中心とする、矢嶋城跡の発掘確認の要望が高まっていた。等々……。厳しい村財政下の中での調査であったが、学術的重要さの認識を更に深め、貴重な文化財としての理解を高めるなど、地域住民への精神的高揚を進展させたことは、たいへんありがたい。

然しながら事業内容は、第一次調査であるため、全ての遺構確認と遺構内の結びつきなど、十分な研究成果は今後の発掘にまつられる。

また、城跡全体の発掘が緊急、かつ重要であると共に遺跡の保護をどうするか……。

末尾ではありますが、調査主任を快よくお引き受け、終始献身的に活躍下さった国学院大学の上代純一氏、本調査の初期の計画・立案に心をくだかれた学芸員の福島邦男氏、出土人骨の整理・分析をして下さった西沢寿晃先生、地質調査を担当していただいた飯塚広行先生、国学院の学生諸君・作業員の方々が、恰も酷暑のさ中の作業だけに、そのご苦労は大変なものであったこと心より感謝と敬意を表わす次第です。また、地域の方々の御協力も忘れられません。

県教育委員会文化課の先生方に温いご指導をいただいたことも紙上をもってお礼申し上げます。

浅科村教育委員会

教育長 橋場安国

1985年

例 言

1. 本書は、昭和59年7月、矢嶋城跡が気象災害及び畑地の荒廃等による自然崩落・破壊の影響を受け、現形を維持することが困難な状況下にあったため、緊急に発掘調査を実施した調査報告書である。
2. 本調査は、浅科村教育委員会が発掘調査団を組織し実施した。
発掘調査 昭和59年7月23日～昭和59年8月19日
報告書作成 昭和59年8月20日～昭和60年3月20日
発掘調査対象面積 20,000㎡
地形測量面積 30,000㎡
3. 写真撮影（遺構・遺物等）は、調査員と調査事務局が行った。
人骨は、西沢寿晃が行った。
4. 遺物の整理（洗浄・注記）は、福島茂子、瀬戸口真人、菊池俊道、浅香範重が行った。
遺物の実測図作成及び遺物の復元は、小宮山克己が行った。
5. 矢嶋城跡の地形測量（航空機による）は、新日本航業株式会社甲信越支店が行った。
6. 本文の執筆は、次のとおりである。
第I章 調査事務局及び調査員
第II章 第1節 上代純一 第2節 福島邦男 第3節 飯塚広行
第III章 第1.2節 上代純一 第3節 小宮山克己 第4節 西沢寿晃
第IV章 上代純一
7. 遺物及び諸記録は、浅科村教育委員会が保管している。
8. 本書の編集業務は、浅科村教育委員会が行った。

本文目次

序

例言

第I章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査団組織	1
第3節 調査日誌	2
第II章 矢嶋城跡の歴史的環境と地形・地質	3
第1節 歴史	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 地形・地質	8
第III章 矢嶋城跡の遺構と遺物	12
第1節 各曲輪配置	12
第2節 遺構	13
第3節 遺物	15
第4節 出土人骨	19
第IV章 総括	21

図版目次

第1図版 矢嶋城跡全景	1
第2図版 矢嶋城跡出土遺物	2
第3図版 矢嶋城跡出土遺物及び柱穴図版	3
第4図版 矢嶋城跡出土遺物	4

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

矢嶋城跡の緊急発掘調査は、ここ数年来の大雨及び冬期間における凍上りの影響と地域経済の変遷から畑地の荒廃が進み、重要な遺跡の崩落や自然破壊が進行しつつある状況にあった。

このことから、緊急に矢嶋城跡の発掘調査事業を実施し、遺跡の構造（測量図）及びトレンチ法による遺構・遺物の確認・調査を行い記録保存することになった。発掘調査にあたり、昭和59年7月22日に調査団及び関係者全員による調査事前打合せ会議を開催し、7月25日から調査を開始した。

第 2 節 調査団組織

- 調査団長 橋場 安国（浅科村教育委員会 教育長）
調査主任 上代 純一（国学院大学職員・歴史考古学会部長）
調査員 小宮山克己（国学院大学 歴史考古学会長）
特別調査員 西沢 寿晃（信州大学医学部第二解剖学教室）
〃 飯塚 広行（国学院大学久我山高等学校 教諭）
作業員 国学院大学 歴史考古学会：瀬戸口真人・菊池 俊道・浅香 範重
望月町：倉見 渡・荻原袈裟吉・掛川喜四郎・樋下 好夫・臼田春太郎
福島 茂子・桜井 卯作・浅田 怜
浅科村：小泉 保英・重田 洋子・町田 孝子・小林 源子・重田 尚美
重機オペレーター：金井 靖
協力者 横山 実（国学院大学法学部 助教授）
福島 邦男（望月町教育委員会 学芸員）
高林 重水（岡谷市教育委員会）
小沢由香利（ 〃 ）
調査事務 教育委員会：佐藤治郎（教育次長）・丸山俊雄（係長）・正木良明（係長）
高野庄次郎・小林智恵子・北原郁生

第3節 調査日誌

- 7月23日 (月) 晴れ。トレンチ設定の為、現場の草刈り及び原点移動作業。雑草の繁茂が著しく作業に困難をきたす。
- 7月24日 (火) 晴れ。Aトレンチ設定の為の杭打ち及びBトレンチの設定。
- 7月25日 (水) 晴れ時々雨。本日より発掘開始。作業開始前に地鎮祭を行う。Aトレンチの一部にテストピットを掘り、土層確認し、表土削除に重機投入を決定する。
- 7月26日 (木) 晴れ後雨。重機による表土剥ぎ開始。主郭直下より堀が確認される。午後4時頃より雨の為、重機以外の作業を中止。
- 7月27日 (金) 快晴。重機及び鋤簾による表土削除作業。
- 7月28日 (土) 晴れ。Aトレンチ内より、土鍋の破片等が出土。ピット及び溝のプランが検出される。
- 7月29日 (日) 雨のち晴れ。午前中雨の為作業中止。午後、遺構のプラン確認。ピット多数検出される。
- 7月30日 (月) 晴れ。遺構のプラン確認作業を続行。堀から人骨・五輪塔空風輪出土。
- 7月31日 (火) 快晴。B・Cトレンチ内遺構確認を終了し、ピット掘りを開始。堀から土師質土器出土。
- 8月1日 (水) 晴れ。トレンチ内のピット掘り、堀のセクションベルト撤去。
- 8月2日 (木) 晴れ後曇り。B・Cトレンチ平面測量。
- 8月3日 (金) 晴れ後雨。Dトレンチ内ピットの平面測量。Eトレンチ土拡検出。
- 8月4日 (土) 曇り後晴れ。各トレンチ内遺構清掃及び記録写真を撮る。
- 8月5日 (日) 晴れ。堀の清掃及び記録写真。
- 8月6日 (月) 晴れ後曇り。各遺構の平面測量。
- 8月7日 (火) 晴れ。各トレンチ内の基準ポイントの確認。
- 8月8日 (水) 晴れ。ピット・土拡等の位置確認。
- 8月9日 (木) 晴れ。堀のエレベーションの記録。
- 8月10日 (金) 晴れ。福祉センター内での遺物整理。堀のエレベーションを図化。現場での作業終了する。

第II章 矢嶋城跡の歴史的環境と地形・地質

第1節 歴史

矢島氏の発祥は定かではないが、鎌倉時代の佐久は滋野氏や小笠原氏（大井）が大きな力を持っていた。滋野氏は木曾義仲、小笠原氏は源頼朝方としての関係があった。

滋野氏は一族に、根々井・望月・落合・小室・志賀・平原そして矢島などの氏があった。これら滋野一族は義仲のもとに馳せ参じ、平家一門との戦いに参加したのである。この頃の矢島氏の名を見るに、承久記にやしまの次郎、源平盛衰記に八島四郎行忠の名を見ることができる。滋野一族は義仲没落後、鎌倉幕府の後家人となってその本領の推持をしたのであろう。

鎌倉末に至って朝廷が南北に分裂すると、滋野系は南朝方に、小笠原系は北朝方に所属し、相対立することになった。しかし、この対立も正平7年（1352）南朝方は信濃宮宗良親王を奉じて征夷大將軍とし、足利尊氏追討軍を起した。この戦いでは初戦順調にあり、鎌倉まで迫ったが、武蔵の国の戦いで総崩れとなり、滋野一族の多くを失った。宗良親王は信濃に帰ったが、これ以後佐久の勢力は小笠原系の大井氏が大きく伸ばすことになったのである。

その後、室町時代に至って矢島氏の名をみることができるものに「諏訪御符礼の古書」があり、それには、

文安5年(1448)	花会	矢島郷	矢島栄春	文明5年(1473)	花会	〃	〃
康正元年(1455)	五月会	〃	大井政光	文明16年(1484)	五月会	〃	矢島道慶
寛正3年(1462)	〃	〃	矢島光友	文明17年(1485)	〃	〃	〃
応仁2年(1468)	〃	〃	〃	延徳元年(1489)	〃	〃	大井光友
応仁3年(1469)	〃	〃	〃				

等が散見される。

その後、戦国時代に去ると甲斐武田氏の佐久侵攻が始まる。ここでは戦乱の後、佐久武士団は武田氏に属することになるが、武田氏が天正10年(1582)に滅亡すると徳川に降りた。しかし、それ以前に「矢島12頭、出羽由利郡へ移住」の記録もあり、応仁元年(1467)佐久より出羽由利郡への大移動という事件があった。矢島の旧勢力のその全んどが移住したと考えられるが、尚矢島に残った者もあったのであろう。その残った者が「諏訪御符礼の古書」に名が出ているものと考察する。

以上が大まかな佐久と矢島の歴史であるが「諏訪御符礼の古書」に散見する矢島郷の武士達の中に、大井氏が出てくるという疑問がある。矢島氏は滋野氏系であるにもかかわらず、小笠原系の大井氏の血縁関係があったのではないかと考える。また違った見方をすれば、下克上、群雄割拠の時代を繁栄して矢島氏と大井氏による矢島郷の争奪戦があった可能性もありえる。この問題点に関しては、今後の史料の発掘が必要である。

第2節 歴史的環境

浅科村には、城跡が4ヶ所に存在しているが、文献的資料が乏しいことから、当時の状況を把握することは、まず不可能といわざるを得ない。時期は、室町時代～戦国時代の間で捉えることができる。

矢嶋城跡は、御牧原台地最南端に位置しており、またこの周辺を中心に、望月町、立科町、北御牧村、小諸市などに極めて多くの城跡が分布している。その概要を分布図（第1図）の範囲内で示し本節とする。



第1図 矢嶋城跡位置図及び周辺城跡分布図（1：50,000）

第2図 矢鳴城跡全体図 (1:3,000)



第1表 城跡の概要

浅科村

地図番号	名称	所在地	立地	規模(m)	保状	存続時期	築・在城者	概	要
1	矢嶋城跡	大字矢島字城平・下屋敷・中屋敷	丘陵台地	400×200	良	～戦国	矢島氏		矢島の南北に連なる丘陵の突端に位置し、五郎兵衛新田を一望に見渡せる。宝泉寺は菩提寺といわれる。
2	天徳城跡	大字矢島字天徳	山頂山腹	250×200	不良	～戦国	矢島氏		矢島城跡東側の山頂に位置し、副城ないし支城的役割りを果たすと考えられる。絶景の地である。
3	御馬寄城跡	大字御馬寄字城・城山・城の腰・城の上	台地	72×36	不良				
4	五領城跡	大字耳取字五領・白合・大字塩名田	丘陵	20×20	不良	～戦国			小諸市との境に位置しており、耳取城南方向遠見城とする説もある。

望月町

5	細久保城跡	大字布施字細久保・虚空藏	山頂山腹	650×350	やや良	～戦国	布施氏ないし矢島氏		浅科村にかかると山頂部に位置しており、主郭は破壊されているが、曲輪や空堀りが明瞭に残っている。
6	虚空藏城跡	大字布施字虚空藏	山頂山腹	36×27	やや良	～戦国	布施氏ないし矢島氏		浅科村にかかると山頂部に位置している。狼煙台と伝うが真島についてはこれからの調査による。
7	望月城跡	大字望月字城・城前・寺前他	山頂山麓	1500×500	やや良	室町～戦国	望月氏		南北1500mにも及ぶ雄大な遺構で、南端に支城、北端に本城が位置する。要害緻固で絶景である。
8	布施城跡	大字布施字古城	丘陵	320×160	不良	室町～戦国	望月氏・布施氏		梅深院・布施小学校を含む北側の低地な丘陵にある。曲輪や空堀りは痕跡を残すが、破壊が激しい。
9	式部城跡	大字布施字城・城平・坪ノ内・城下内宮・主庭・馬場沢他	山頂山腹	650×450	良	鎌倉(?)～			式部の西側の山塊に位置し、主郭・帯曲輪・腰曲輪・空堀り等極めて保存が良い。主郭には土塁が残る。
10	式部居館跡	大字布施字大庭	平地	100×80	良	鎌倉～	望月氏		式部城主の居館にも利用されたと考えられ城跡の麓に位置する。土塁、空堀り、井戸、井戸柱が明瞭に残っている。
11	天神城跡	大字協和字本城・尾崎・塚田・青柳上天神反・下城口・堂上	台地	1500×500	やや良	鎌倉～南北朝	望月氏		細長い尾根状台地に立地する。主郭には、高さ5mにも及ぶ土塁が残る。曲輪、空堀り等大規模である。
12	春日城跡	大字春日字ゆる久保・法蓮寺・堀端城久保・駒込・小庭・堀端小路他	山頂山腹	600×100	良	～戦国	春日氏		蓼科山を背景に春日の正面に位置する。主郭、曲輪、空堀り等良好に残る。康国寺は春日氏の居館跡と伝う。
13	柄久保城跡	大字春日字柄ノ久保	山頂丘陵	420×220	やや良	～戦国	春日氏		春日城跡の支城的役割りを果たすものと考えられ、小規模ながら絶景である。

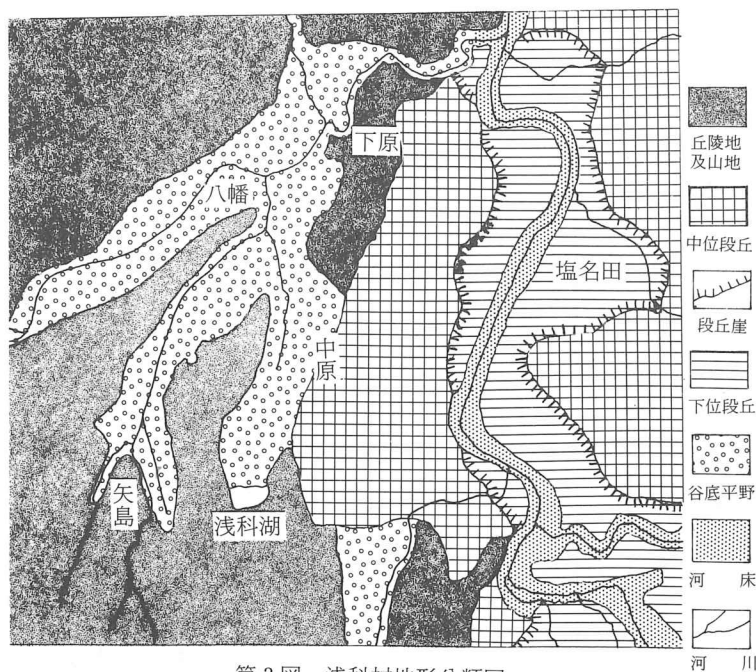
第3節 地形・地質

1. 地形

浅科村は地理上東経約138°24′、北緯約36°16′にあり、日本列島のほぼ中央部に位置している。この地帯は、日本列島をほぼ南北に切る大断層線である糸魚川—静岡構造線の西側にあたりフォッサ・マグナ地帯と呼ばれているところである。フォッサ・マグナ地帯の東縁は浅間・富士などの新しい火山が噴出したため明瞭ではない。このフォッサ・マグナ地帯には、長野盆地、松本盆地、上田盆地、佐久盆地、甲府盆地などの低地帯が連続し、その間に富士火山、蓼科火山、上信火山帯などが雄大な裾野を広げ、地形上も複雑な地域であり、さらに日本列島を東北日本と西南日本とに分ける地体構造上重要な地帯になっている。

浅科村は佐久盆地の北西端にあり、千曲川が村を南北に横切って流れ、村の北側を劃する御牧が原丘陵の東縁の狭窄部を通して北へ流下している。村の東側は、浅間火山の軽石流及び泥流堆積物からなる無数の小型“流れ山”地形の丘陵で区切られている。西側と南西側は、蓼科火山の拡大な裾野の一部である丘陵地になっている。南東側は千曲川流域に広がる平坦な佐久盆地へと続いている。浅科村の中央部は、標高670m前後の平坦地が広く発達し、区画整理のよくいきとどいた一大水田地帯になっている。しかし遠く、浅間山や烏帽子岳が北側に聳え立ち、西側から南

側には雄大な蓼科山塊が連なり、また東側には関東山地の山波が続き、概観して、風光明媚な高原盆地の景観を呈している。第3図の浅科村地形分類図に示したように、千曲川の両岸には河岸段丘の発達が顕著である。塩名田、御馬寄などの集落をのせる下位段丘が、千曲川河床から比高5~10mの段丘崖を作って両岸に分布し、中位段丘とは明瞭な段丘崖によって段差をつけている。中位段丘は千曲川に沿って広く分布し、浅科村中央部の標高670~680mの

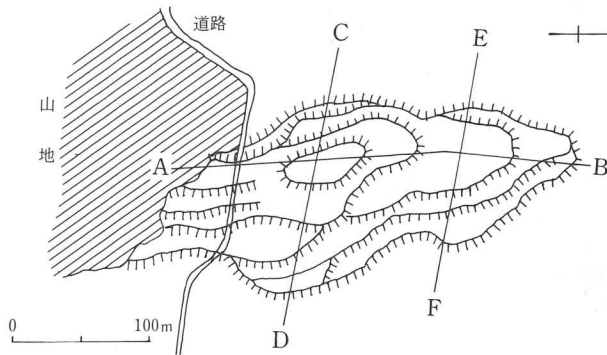


第3図 浅科村地形分類図

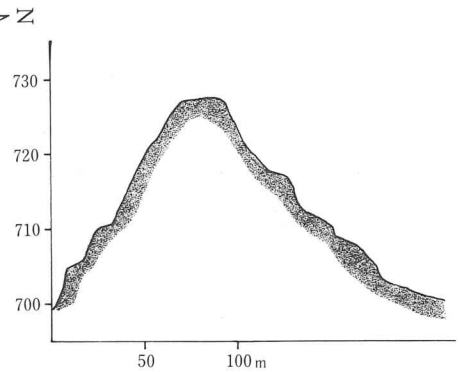
平坦面を作っている。この中位段丘平坦面は、浅科村上原と中原を結ぶ線あたりを背斜軸として東側と西側に僅かに傾斜している。蓼科山麓からの小河川である柳沢川や中沢川などの侵食とも考えられるが、地形学上段丘面と侵食面との境ははっきりと識別できなかったが、上原から中原線を一応中位段丘面と谷底平野との境界線と推定した。この境界線付近は、段丘面の侵食や泥流堆積、洪水堆積の錯綜したところであろうと考えられる。

蓼科山麓は、複雑な無数の舌状丘陵になって盆地内に入り込み、その先端に八幡、矢嶋、鶴沼、上原などの集落が位置している。この付近の蓼科山麓は、谷の発達がいずれも小規模で豊富な溪流を持つものはないが、布施川の谷には広い谷底平野を発達させている。

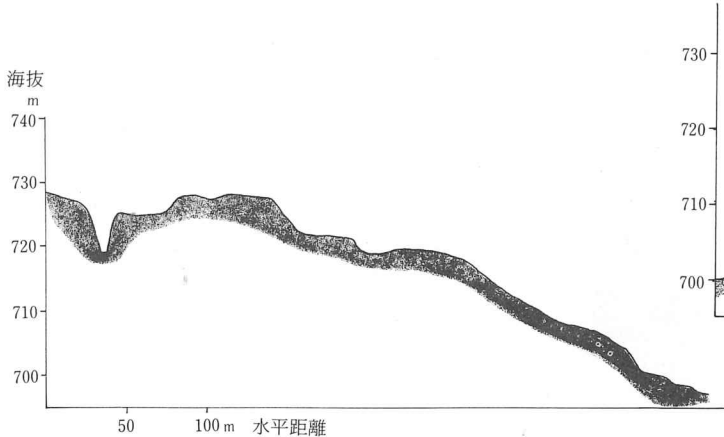
矢嶋城跡は、浅科村の南西部に位置し、中沢川の両側に蟹の鉋のように張りだした二つの丘陵の間に挟まれた小さな丘陵にある。城跡域の最高地は標高728mで、比高約30mのところにある。第4図は航空写真によって判定した微小平坦地と緩斜面である。第5図・6図・7図は縮尺500分の1の測量図から求めた断面図である。城跡域の丘陵には、人工的に削られたと考えられる微小平坦面が数段取りまき、雛壇状になっている。



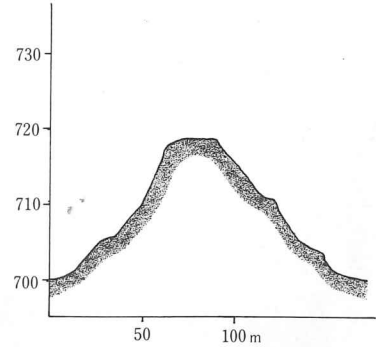
第4図 航空写真からみた微小平坦地及び緩斜面



第6図 C-D断面



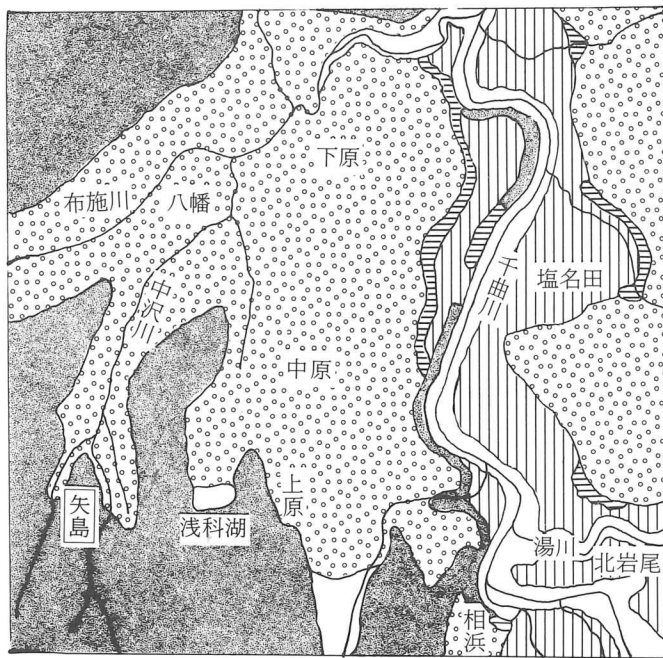
第5図 矢嶋城A-B断面



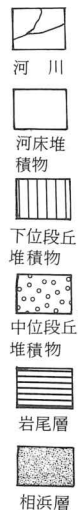
第7図 E-F断面

2. 地質

日本列島の中央部には、日本列島を東北日本地質区と西南日本地質区に分ける地体構造上重要なフォッサ・マグナ (Fossa magna) と呼ばれる地帯があり、浅科村は、この地帯内に位置している。フォッサ・マグナ地帯は新第三紀に大陥没を起した大地溝帯で、その後も地殻変動が続き、隆起運動や火山噴出などを繰り返してきた複雑な地質構造を有しているところである。フォッサ・マグナの西縁は糸魚川—静岡構造線によって境され、また東縁は富士・浅間などの新しい火山が噴出したため判明しにくく、一時岩村田—若神子線および藤野木—愛川線がとられていたが、最近ではさらに東方の柏崎—銚子構造線まで広げられている。フォッサ・マグナの成因については、関東山地と赤石山地の山脈走向が糸魚川—静岡構造線を境にして“ハの字”型に連続していること、さらに両山地が外帯系の帯状地質構造を持つことなど、地質構造上の類似点が多いことから、かつて一連の造山帯であったものが、糸魚川—静岡構造線と呼ばれている大断層の形成によって山脈が折曲げられ断切られたところに生じた割れ目であろうと考えられている。形成当時は日本列島を二つに分ける一大海峡になっていたが、その後の隆起運動などで、海峡は陸地化し、やがていたるところに低湿地や湖沼が形成されて新しい地層が堆積し、また新期火山の噴出などがくり返されて現在に至ったと推定される。



第8図 浅科村地質図



浅科村付近の地質構造は第8図の地質図に示されているように、古い地層は蓼科火山噴出物や千曲川の河川堆積物に覆われて、地質分布上はそれほど複雑ではないが、堆積状況がかなり錯綜しているため、地層境界線の認定や層序の推定がかなり困難である。

浅科村の土台は、周囲の丘陵に広く分布する相浜層である。この地層は望月町の東の瓜生坂付近から浅科村、佐久にかけての蓼科火山裾の末端部と、佐久市相浜から御馬寄に至る千曲川左岸に露出している。模式

地は瓜生坂峠付近と佐久市相浜付近で、層相は、砂岩、泥岩、礫質砂岩、凝灰石、火山円礫層、珪藻土層などが互層でほぼ水平に堆積している。また層中に赤褐色のスコリア層や黄褐色のパミス層などの薄層をはさんでいる。全般的に層理は明瞭で、水平層であるが、クロスラミナや小褶曲の発達している場所もある。層中の火山礫や火山噴出物は、蓼科火山の初期噴出物と推定されている。砂岩層や泥岩層の中から腐植した樹木の幹や茎、根などの化石が、また泥岩から珪藻化石が多く産出している。化石の状況から更新世前期の湖沼堆積物と推定されている。更新世前期頃この付近一帯は大きな湖（北佐久湖）になっていて、周囲の火山活動も盛んであったため、砂岩層や泥岩層などの湖成層の間に、火山活動による凝灰岩層や軽石層の砂岩層物が挟まれ、また火山砕屑物起源の火山礫などが堆積したものと考えられる。

浅科村における相浜層は、中沢川上流の“小泉ニット工場”の裏手の大露頭に見られる。上部は植物化石を含む砂岩層、泥岩層、その間に黄褐色のパミス薄層を挟んだ水平層が互層をなし、砂岩層中にはクロスラミナが発達している。上部砂岩層の走向はN65°W、傾斜はなくほとんど水平である。下部は分級度のよい安山岩質の火山円礫層で構成され、樹木の腐植化によって出来た空洞がところどころに見られる。その他の場所では、上原の南の丘陵を通る山道の崖や、矢島から入布施に行くときに越えていく山道の崖、また石突川が千曲川に合流する駒寄付近などに観察できる。

浅科村の中央部平坦地は、千曲川の段丘堆積物と蓼科火山山麓丘陵地から流下した泥流堆積物や洪水堆積物が錯綜して堆積しているため、千曲川の中位段丘砂礫層として識別できるものがなかった。中原の浅科村統合小学校建設予定地地質調査資料では、地表から0.4mぐらいの厚さで表土があり、その下5mぐらいまでに火山灰砂や火山礫、シルトなどの火山性堆積物が見られ、さらにその下は固結した砂岩層、凝灰岩層が検出されている。固結した砂岩層や凝灰岩層は相浜層と思われる。中位段丘堆積物は、凝灰質礫層、火山灰砂、火山礫などで、相浜層の上に堆積している。表面はローム層に覆われていない。中位段丘面を侵食し、河床堆積物で埋めていったと考えられる布施川や中沢川流域の堆積物は、一つの地質区として識別できなかったので中位段丘堆積物として一括した。

下位段丘堆積物は、千曲川に沿った兩岸の比高5～10mの段丘崖に見られる。堆積物は膠結度の悪い砂層や礫層からなる。ローム層の堆積は見られない。

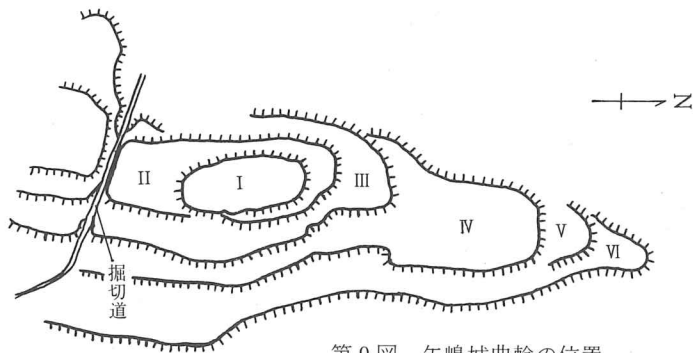
岩尾層は、御馬寄付近の中位段丘崖と下位段丘崖に小規模に露出している。河川堆積物と推定され、火山岩塊や礫を含む凝灰質泥流層である。

矢嶋城跡は、相浜層の丘陵にあり、人口的に砂岩層を切り崩して作った平坦面が数段見られ、薄い表土が覆っている。この付近の丘陵の表面はローム層に覆われているので、人工的な平坦面を作るためローム層の削剝もおこなったものと考えられる。

第III章 矢嶋城跡の遺構と遺物

第1節 各曲輪配置

本城跡は、その城の持つ特徴から、主郭を中心に曲輪を同心円状に配置する輪郭式の形態を持ち、舌状台地を使用した城郭としては特異な築城方法を取りいれている。郭及び曲輪はI～VIに分け下図のとおりである。



第9図 矢嶋城曲輪の位置

I. (主郭)

この城の中心であり最高所に位置する。本調査では調査区域外であり発掘調査をすることができなかつた。形状は南北を長辺とする長方形であり面積は約2000平方メートルある。現存状態は良好であり北側には土塁の痕跡を残す。ボーリング調査をした段階では周囲は客土をして面積の増加を計っているようである。

II. (腰曲輪)

Iを防御する曲輪で、Iを中心に旋状に配置されている。特に注目すべきことは、I東側に虎口を設けていることである。またI郭北側下には空堀を設けており、その規模から相当の城に対する気がまえを推測することができる。

III. (腰曲輪)

この曲輪も性格はIIと同じであるが、同心同士の形態をとることから面積はさらに広がる。北側におけるIIとIIIの境目の高低差は、0.5m～0.8mにすぎず、IIとIIIを同一曲輪と見なしても問題は生じないが、東側ではII曲輪は先細りながらIへの虎口の程を成し、IIIがIの下を直接防御する形となる。また南側IIとの境は高低差1～1.2mあり、目に見えて曲輪の違いを感じさせてくれる。この曲輪は東・西側共に崩壊が著るしく認められるが、特に西側は崖崩れがありその形状は損なわれている。

IV

城域で一番広い平場面積を持つ曲輪であり、建築遺構（柱穴）も一番多く出現している。IIIとVの曲輪の南北の境は明瞭であるが、東西の境は不明瞭というよりも損失していると考えの方がよい。

V・VI

北側に向けて設け、街道からの直接IVに取り付かれない為の先端防御地点である。面積は少ないがIV・V・VI共に高低差を持って強さを補強している。

堀（空堀）

この城において、堀はIとIIの北側の境に1本と南側で舌状台地との繋がりを絶つ現状道路として使用されている堀切道の計2本の確認ができたが、堀切道に関しては実測図上正確には確認できない。しかし、南側にII・III曲輪の延長と考えられる地形も存在するところから、この堀切道は後世のものとも考えられるので、今後の調査を待ちたいと思う。

第2節 遺 構

各トレンチ概況（第11図1）

調査区域は主郭部分Iを除く全域とされたが、予算の都合上トレンチ発掘として城の遺構確認を目的とした。トレンチは当初A～Fまでを計画し実行したが、AトレンチI郭Fに空堀が出現したのでA1トレンチとし、西側にトレンチ2本を追加拡張しA2・A3トレンチとした。各トレンチ幅は2mとし、A₁-133mm、A₂-31m、A₃-23m、B56m、C45m、D19m、E33m、F27mであり、発掘面積は約750平方メートルである。

A1～A3トレンチ

前述の如く当初Aトレンチを城郭の中心線に設け、II曲輪からVI曲輪までの遺構の検出と各曲輪の切れ目の堀の有無を目的とした。II郭下から堀と人骨の出現をみたので西側に2本のトレンチを拡張した。トレンチは東から西に向けてA1・A2・A3トレンチとした。出土遺構は、空堀1本、溝2本、柱穴40個であった。

Bトレンチ

III曲輪の遺構確認を目的として設けたトレンチで、柱穴6個と土拵1を確認した。

Cトレンチ

IV曲輪の遺構確認の目的として設けたトレンチで、柱穴11個を確認した。

Dトレンチ

BトレンチとCトレンチより柱穴・土拡が検出された後、B・C間を補うため、当初の予定より追加したトレンチであるが、遺構の検出は認められなかった。

Eトレンチ

主郭部分IからII・III・IV曲輪の構造を確認するために設けたトレンチであるが、土拡1個の検出をみた。

Fトレンチ

目的はEトレンチと同じであるが、特に遺構の検出はなかった。

柱穴 (第11図2)

柱穴は円形と方形の二種が検出されたがこの城址では方形の柱穴が主流であった。トレンチ発掘のため各柱穴の関連を求めることは困難であったが、少く共A・Bトレンチ交差付近で3軒以上、A1・Cトレンチ交差付近で4軒以上の建築物があったと推定する。柱穴内の埋積土は半切し断面を確認したが、出現した全てが攪乱されており、柱痕の検出はできなかった。

溝

溝はII曲輪とIII曲輪の境目に検出された2本であり、用途は不明である。これも部分的な出現であるため推定の域を出ないが、出現状態から考察すると飲用もしくは排水などの水利施設ではないかと考える。

土拡

土拡は3個検出した。A1トレンチ内をD-2、Bトレンチ内をD-1、Eトレンチ内のものをD-3とナンバーを付けた。D-1及びD-2に関してトレンチ外に広がっており、全体の形態は不明である。D-3はI郭下に検出され、直径90cmの半円形である。当初井戸址とも考えたが、浅く、甕の埋設址とも考えられる。

堀 (空堀) (第11図3)

調査の中で一番早く出現し、調査時間を費した遺構である。上端6m、底部2.6mの大きい規模のものであり、形状は箱堀と考える。城郭の正面を北とする証拠でもあり、また城郭の中で一番

弱いと感じられる部分の守備補強の施設である。

尚、堀覆土中より出土した人骨は、堀の堆積断面からみると明らかに堀の自然堆積の上に乗っており、その上の埋積土は、その人骨の埋葬時に一括して堀を埋めている。また五輪塔の空風輪も人骨と同じ面に出土したが、形状からは江戸時代のものと考察し、直接この城郭には関係しないと考え、文面のみにて報告とする。

拡張工事

各郭、曲輪共に台地の屋根を広範囲にわたって削平し、残土を曲輪面積拡張のため埋め立て、張り出させている。その埋め立ての状況は、第11図-1におけるトレンチ内の斜線の部分であるが、その面積は正確につかむことができなかった。この全貌を把握することは、今後の研究課題の1つとなろう。

第3節 遺物

1. 築城以前の遺物 (第12図1～3)

1は、土師器の杯である。体部の破片であり、やや丸味があった稜を有し、内外面ともに赤彩が施されている。色調は黄褐色を呈し、胎土に白色・透明・灰色・黄色・黒色の砂を含んでいる。A I トレンチ出土。

2, 3は、須恵器の破片である。甕形土器と思われ、外面に叩目、内面に指ナデの痕がみられる。共に白色・透明・黒色の砂を含み、暗青灰色を呈する。A I トレンチ出土。

2. 中世 (第12図4～第13図26)

(1) 土師質土器 (第12図4～9)

①かわらけ

完形は4, 5のみで、5は表採資料である。(註1)4, 5には、油煙の付着が認められ、灯明皿としての機能が考えられる。

手法は総てロクロ作りとみられるが、5には体部下半の一部に輪積痕らしき痕跡がみられ、或は、紐作りロクロ調整の可能性も考えられる。底部には、回転糸切痕がみられ、ロクロの回転方向は、4, 5, 9は時計回り、他の資料は判然としなかった。尚、4のかわらけはBトレンチ拡張部埋め土からの出土である。

第2表 かわらけ 観察表 (註2)

番号	出土地点	口径	器高	底経 (cm)	胎土	(砂・含有鉱物)	色調
4	Bトレンチ	8.4	1.9	6.4	細+粗+礫	a + b + e + (g)	B (一) B
5	表 採	7.4	1.9	5.4	細+粗+礫	a + b + (e) + f + (g)	B (一) B
6	Aトレンチ	8.8	1.7	5.6	細	a + g + h	A (A) B
7	Aトレンチ	9.2	2.4	6.2	細+粗	a + b + e + (g)	B (D) E
8	Aトレンチ	—	—	8.0	細	a + e + g	B (E) A
9	堀着底部	—	—	9.4	細+粗	a + b + g + h	B (A) B

②土鍋 (第12図10~16)

出土した土鍋の破片は、総数35片で、口縁部破片3片、胴部破片29片、底部破片3片であった。内耳については、把手が剝離した資料がみられた為、環状の把手を有する所謂「内耳土鍋」とみられる。

第3表 土鍋観察表

番号	出土地点	胎土	(砂・含有鉱物)	色調	備考
10	堀着底部	細+粗	a + b + e + g + h	D (B) C	
11	Aトレンチ	細+粗	a + b + e + (g)	D (B) B	15と同一個体
12	Bトレンチ	細+粗	(a) + b + e + (g) + h	G (D) B	14と同一個体
13	Aトレンチ	細+粗+礫	(a) + b + e + (g) + h	E (D) B	
14	Bトレンチ	細+粗	(a) + b + e + (g) + h	G (D) B	
15	Aトレンチ	細+粗	a + b + e + (g)	D (B) B	
16	Dトレンチ	細+粗+礫	a + b + e + g + h	F (F) D	底経約21.6cm

+

③火鉢 (第12図17)

四足の火鉢と思われる。内面に指ナデ、指頭痕が認められる。胎土に白色・透明・黒色・赤色の砂を含み、外面は黄褐色～黒色、断面黒色、内面は赤色～橙色を呈する。二次的に火を受けた痕跡がある。堀の覆土より出土。

(2)瓦質土器 (第12図18)

小形の火鉢と思われる。口唇部は平坦面をなすが、口縁は鐙状になっており、断面三角形を呈する。ロクロ成形により、胎土に透明・白色・黒色の砂、金雲母片を含有し、黒色を呈する。Bトレンチ出土。

(3) 陶磁器 (第12図19~22)

①山茶碗 (第12図19)

ロクロ成形で、高台は貼付高台である。底裏には回転糸切痕がみられ、高台のつけ痕はナデ調整されており、高台端には靱殻痕が認められる。内面底部には、重ね焼の痕跡をとどめている。色調は灰白色を呈する。Aトレンチ出土。

②瀬戸・美濃系 (第12図20・21)

瀬戸・美濃系とみられるものは、21の天目茶碗、20の折縁深皿の他に、小破片が3点出土している。21の天目茶碗は、飴色の釉が施され、胎土は灰白色を呈する。20の折縁深皿には、黄緑色の釉が施されている。共にAトレンチ出土。

③常滑窯系

合計8片の甕の破片が出土した。ほとんど胴部破片や小破片であった。器厚はおよそ1cm前後で、胎土に小石を多く含み、茶褐色~赤褐色を呈する。

④青磁 (第12図22)

鎬蓮弁が施されている青磁碗である。釉は青緑色を呈し、素地は灰色で堅緻である。表採資料。

(4) 鉄製品 (第13図23)

Aトレンチ出土。6mm×7mm程の角棒状の鉄製品で、角釘の破片かもしれない。

(5) 石製品 (第13図24~26)

①硯 (第13図24)

縦長の長方形を呈する形態と思われ、材質は軟質の青白色の堆石岩(泥岩か?)である。端部は面取りされており、使用痕がみられる。実測図スクリーン部は墨の付着を示しており、割れ口にも墨が付着している。A I トレンチ出土。

①石臼 (第13 図25・26)

25は挽臼の破片である。Aトレンチ出土。

26はつき臼の破片である。

3. 出土遺物に関する考察

(1) 築城以前の遺物

城址以前の遺物としては、土師器2片、須恵器3片のみであった。図示した杯形の土師器は、

小破片からの復元実測であり、口唇部・体部下半を欠損している為に時期を確定する要素は薄い
が、稜の形状、内外面の赤彩等の特徴から、ほぼ7世紀代、それも中葉から後半頃の所産ではな
いと思われる。須恵器に関しては、時期を決定する要素がみられない為、時期判別は不可能だ
が、古墳時代～奈良時代頃のものと思われる。

浅科村には、土合古墳群や入の沢古墳群等、古墳時代後期の群集墳が知られているが、これら
の群集墳成立の背景には、矢嶋城眼下に広がる平坦地を開発し、集落が展開していた事を想定し
得るものである。矢嶋城築城以前、この地に生活の舞台が存在し、やがて築城に伴う譜代に際し
て、それらの生活址は破壊され、消滅したものと思われる。

(2) 中世の遺物

出土したかわらけは、完形2点(うち1点表採)を含む計6点のみであった。これらの資料に
は全てロクロ作りの痕跡が認められるが、第12図5にみられる痕跡が輪積痕であるなら紐作りロ
クロ調整という製作技法も考えられる。形態的には、口唇部は外反し、5・6・7の資料は、口
唇部が尖るが、4は丸味を帯びて体部下半に稜を有する。また5の資料には、底部内面の中央部
に突起を貼付しており、他のかわらけと大きく異なる。望月町天神城(註3)に於ても同様の例
が存在する。胎土に関してみると、6・8を除く他の資料には多量の砂が混入されているものの、
6・8は、より精選された胎土で、色調も白色～灰白色を呈し、他の資料が、ざらついた感じ
であるのに対し、なめらかな器面である。これらの資料は、各々異なる要素を含むものであり、資
料の増加によっては、法量・手法・形態等の諸属性により、分類作業が可能なものと思われる。

土鍋は破片のみであったが、口縁部・胴部・底部各々の破片から、概略的ながら形態を推測す
ることが可能であった。口縁部は「く」の字に外反し、やや内湾気味に立ち上り、口唇部は平坦
で、屈曲部外面には指による横位のナデ、内面には稜を有する。胴部は直立、或はややふくらみ
底部へ至る。製作技法は、紐作り(輪積?)により、器表面を縦方向による指ナデを行った後、
口縁部ヨコナデ及び屈曲部外面の指ナデ、胴部下端のナデが施される。底部は所謂「砂づくり」
により、底部裏はざらつきが顕著で、一見して底部の判明が可能である。これらの特徴から、御
社宮司遺跡(註4)に於けるA Iタイプ、天神城出土資料の一部に類例を求められる。

陶磁器類では、龍泉窯系青磁碗、山茶碗、瀬戸・美濃系の折縁深皿・天目茶碗が、供膳形態の
ものとして検出されており、貯蔵形態のものに常滑窯系の甕の破片が出土している。

矢嶋城から今回検出された雑器類は、遺物の包含層が攪乱されていた為、供伴関係は不明であ
るが、ほぼ14世紀代後半から15世紀中葉頃のものともみられ、土鍋に関しては小林秀夫氏の編年(註
5)によればI期に比定されることから、矢嶋城の年代を今回の出土遺物から見る限りに於いて
は、南北朝～室町期と考えられる。

註1、小泉 玉樹氏所有。氏によれば主郭部分の表採という。

註2、土器の観察はルーペを使用し肉眼で行った。観察は最低10回行い最終的な成果をデータとし

て示した。以下その凡例。

- 砂粒子の大きさ 細……1.0mm以下
- 粗……1.0mm～2.0mm
- 礫……2.0mm以上

構成を十で表す

- 含有鉱物の色調，形状の特徴をまとめ，各々の組合せを示す。

○で囲ったものは，その含有が著しく目立つものを示す。

- a. 透明（粒状） b. 白色不透明（粒状） c. 灰色（粒状） d. 黄色（粒状） e. 茶色（粒状） f. 金色（板状） g. 黒色（板状） h. 黒色（粒状）

- 色調，表面（器肉）内面の順で示した。

- A. 灰褐色 B. 黄褐色 C. 茶褐色 D. 暗褐色
- E. 黒褐色 F. 赤褐色 G. 黒色

註3，望月町教育委員会 1984年「天神城跡緊急発掘調査報告書」

註4，小林秀夫他 1982年「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その5—昭和52・53年度」

註5，註4に同じ

尚，陶器類については服部実喜氏に御教授頂きました。

第4節 出土人骨

出土人骨として上腕骨1本，大腿骨3本が認定された。これらの骨は既に崩壊直前ともいうべき極めて脆弱な骨質で残存したが，骨の表面や内腔には土砂が強く附着して全体に粗糙となり，殊に土中より露呈された際の微動や乾燥で，骨端部などは細かな破片となって散乱した状態であった。そのため採取後，クリーニングを経ての観察に耐え得たものは，人体骨格中でもっとも強壯・長大な大腿骨の骨体を主とした部位であるという結果となった。以下，残存した骨についての概要を記す。（第10図出土人骨）

上腕骨（第10図—1）右，骨体の下端の一部のみである。下端関節部分を欠き，上部の骨体もまったく失われている。しかし他の長骨同様，発掘の際には骨体の一部は散乱状態ながらある程度残存していたように見受けられる。前面の鈎突窩，後面の肘頭窩以下を欠き，辛うじて内・外側顆上縁の形状により右上腕骨の一部であると見なされる。僅かに骨体断面の大きさからやゝ繊細な形態が予想される。

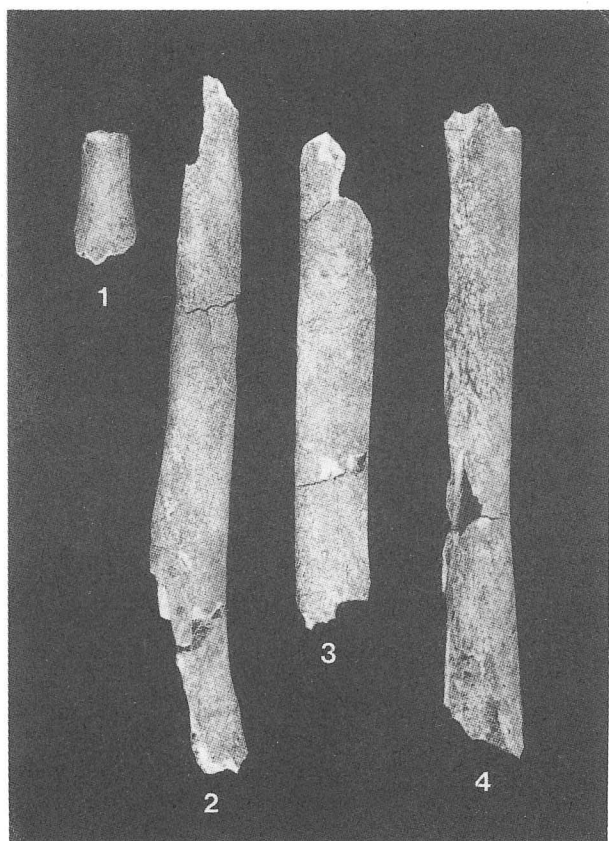
大腿骨1（第10図—2）右，骨体部分が残存する。接合，復元可能であった現長約26cm。骨体は伸直でやゝ太く頑丈な感を与える。粗線は表面が荒れ欠損した部分もあるが，中等度の発達で，内・外側唇などの区別はつかない。他の骨も同様であるが，新しく剥落した緻密質の断面は軟か

な白堊状を呈している。

大腿骨2（第10図-3）左、骨体の中央部分。現長約19cm。両端を欠失するが骨体の横径・矢状径や形状からみて大腿骨①と同一個体のもものと推測される。右側より骨体後面の保存が良く、粗線がやゝ強く発達している傾向が窺える。

大腿骨3（第10図-4）右、骨体部分のみ。現長約24cm。粗線は中央部分数cmにわたりやゝ強い稜状の発達をみせるが、全体的に弱度である。外側唇がやゝ強く発達し、結節状を呈する部分もある。左右対をなす大腿骨に比して、矢状径が厚く、横径が小で、中央部の断面は円型に近いが、全体的な形状としては大きな相違はないように思われる。

以上のとおり、出土人骨は大腿骨の数や形態からみて2個体のもものと見なされるが、他の部位の骨は全く消失しているので、年齢・性別等の推定は一切不可能である。人骨は集石の直上に一部は石に密着し、間隙に嵌入するなどやゝ不規則な一で遺存していたが、本人骨のみを二次的に移動したものと考へられず、姿勢や頭位は不明ながら2個体が並列的に埋葬され、他の大部分の骨は自然に不朽・消失した墓址のものともみてよいであろう。



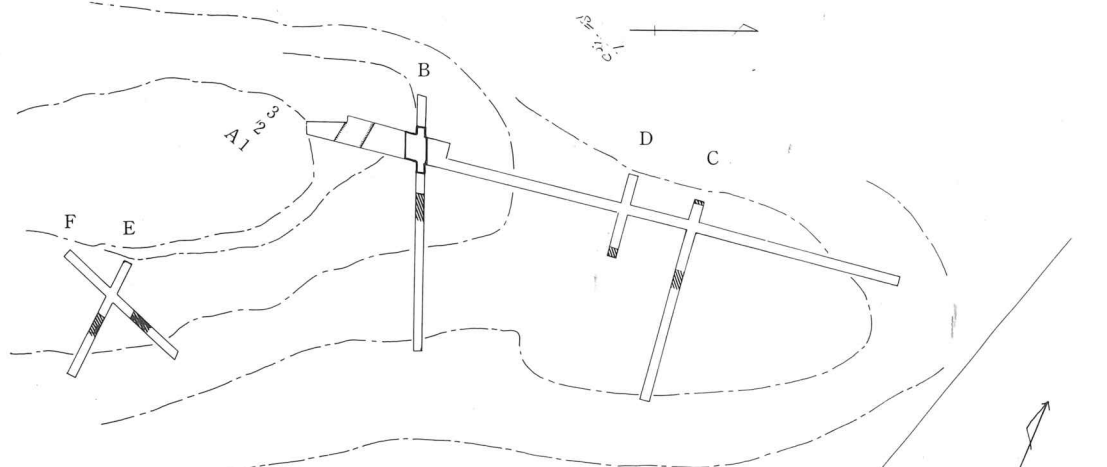
第10図 出土人骨

第IV章 総括

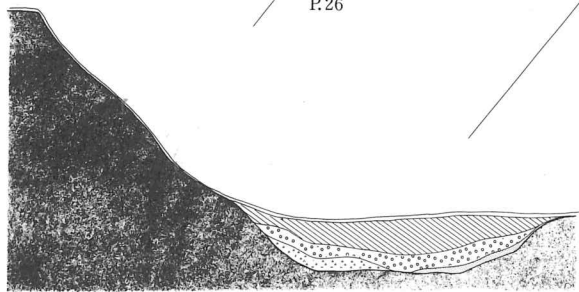
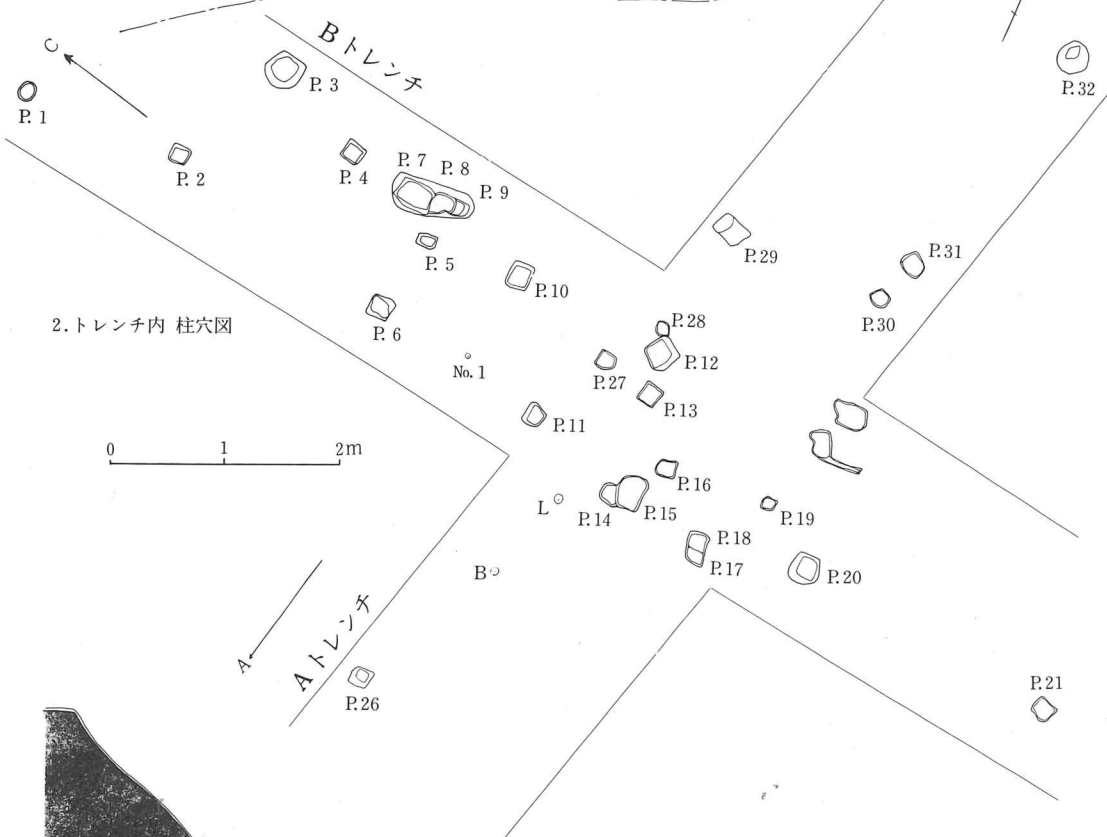
矢嶋城を年代的に考察すると、輪郭式で単純な築城形式、I（主郭）の虎口の形態、出土遺物等から比較的古いタイプの城と考える。時代的には、南北朝から室町時代早々と推定する。しかし戦国時代には使われていないと考えざるを得ない。城は築城に際しては、最新の技術を用いるものであり、また新技術が伝わればそれを用いるといった具合に備えに関しては形式的に流動的な姿勢をとるものである。矢嶋城にはそういった痕跡がみられない。ただし、築城に際しては舌状台地を占地するも、梯郭式の形態を用いれば比較的簡単ですむところを、時間をかけて、大土木工事を行い、輪郭式の城郭に仕立てている。また現在の発掘状況に、戦闘に使われた痕跡もない。築城の目的は街道の抑え等のように戦術的なものではなく、非常時に矢嶋氏を守ることが主目的と考える。尚、矢嶋城の西側に対面する現寶泉寺裏の天徳城は、矢嶋城の西側の谷に敵が進出し、城の搦手を攻撃されるのを防ぐための砦と考えるが、矢嶋城の前身であるという説も否めない。また城の東側の谷の中に、農業構造改善事業前には、中島（本文4P第1図参照）という丘が存在したという事実も捨て難い。また、これも断言できることではないが、城の周辺の田圃の地主に農業構造改善事業前の田の状況を訪ねたところ、背の立たない田がいくつか存在したという話を聞いた。

以上の事項をまとめ推考すると、矢嶋城は、現在の一台地ではなく、その東西の谷と舌状台地を含め、泥田濠を施した一大要塞の体を為すものである。今後の調査はこのような事項を踏まえて行いたい。

1. トレンチ配置及び削平残土曲輪拡張図



2. トレンチ内 柱穴図

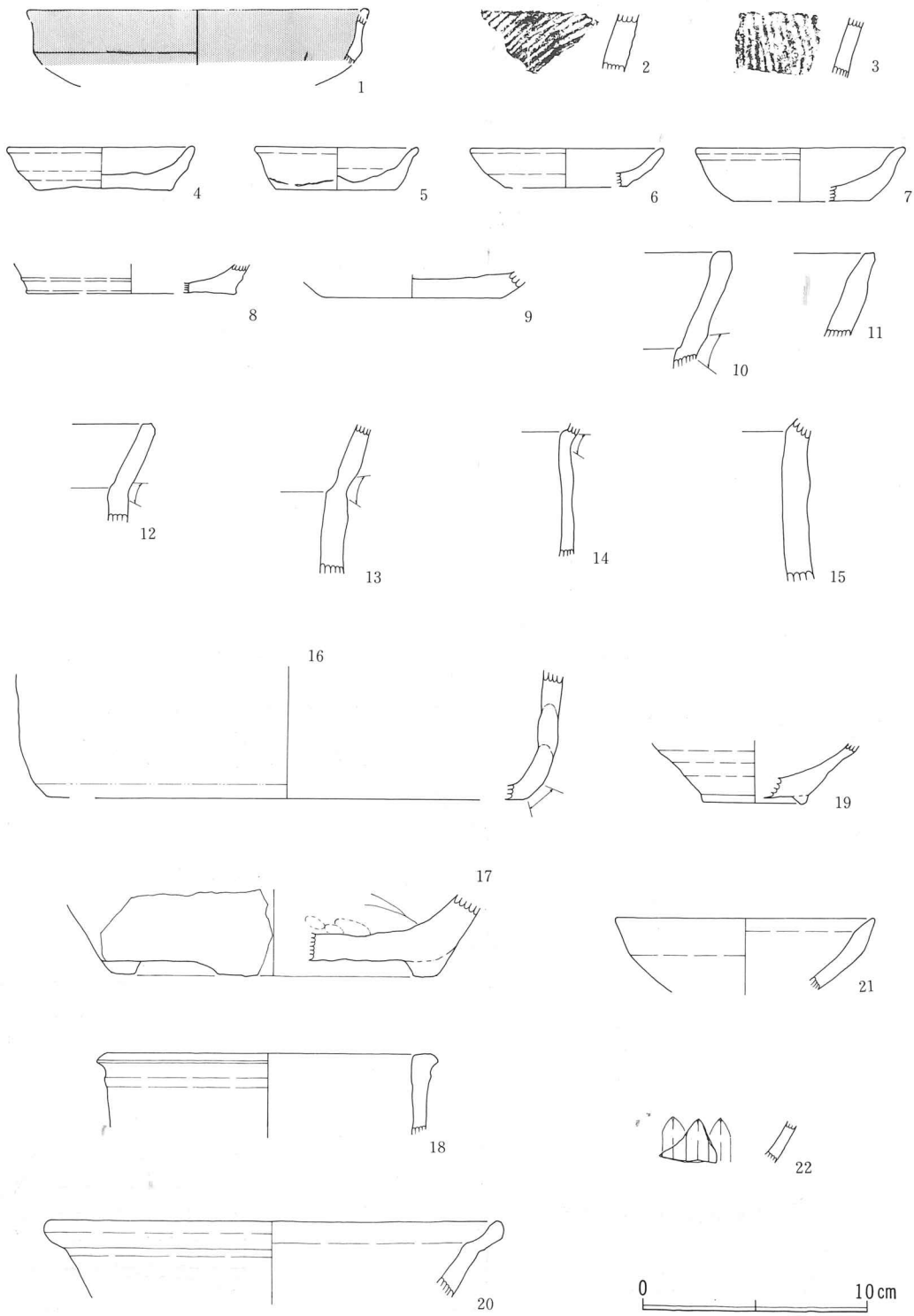


3. 空堀断面及び土層図

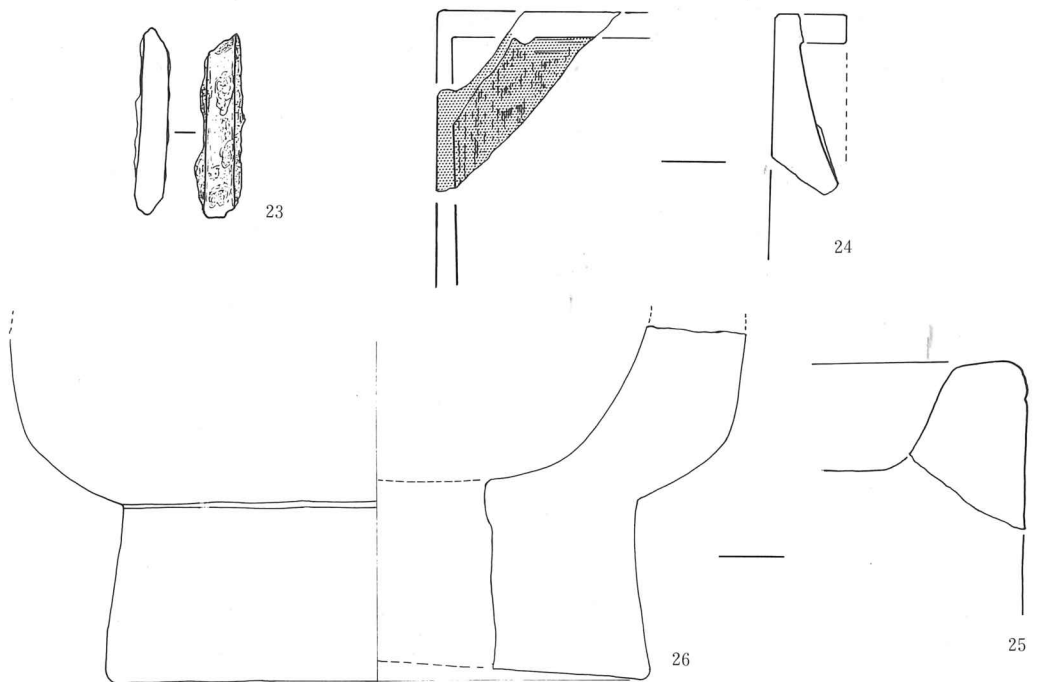
- 1 □ 表土
- 2 ▨ 黄褐色土層
- 3 ▩ 茶褐色土層(礫を含む)
- 4 ▪ 黒色土層(砂礫を含む)
- 5 ▫ 暗褐色土層(砂礫を含む)

色調 ④ 2 > 1 > 3 > 5 > 4

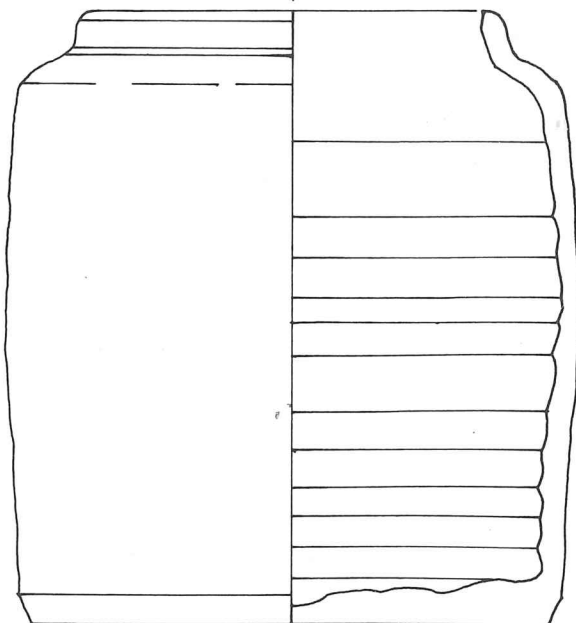
第11図 トレンチ配置及び削平残土曲輪拡張図



第12図 矢鳴城跡出土遺物



0 10cm



寶泉寺所蔵の蔵骨器(鎌倉時代)

0 5 10cm

第13図 矢鳴城出土遺物

参考文献

- 赤羽一郎 1984年『常滑焼—中世窯の様相—』考古学ライブラリー23 ニューサイエンス社
- 上田市教育委員会 1977年「塩田城跡第2次発掘調査概報」
- 上田市教育委員会 1978年「塩田城跡第3次発掘調査概報」
- 大熊城址遺跡調査団・諏訪市教育委員会 1974年「諏訪市大熊城址遺跡」
- 北佐久郡役所 大正4年「北佐久郡誌」
- 埼玉県遺跡調査会 1978年「武蔵加納城址」
- 埼玉県遺跡調査会 1980年「舌栢間遺跡」
- 埼玉県遺跡調査会 1978年「菅谷館跡」
- 埼玉県遺跡調査会 1979年「越畑城跡」
- 坂本美夫 1983年「山梨県に於ける15世紀以降の土師質度編年—境川村寺尾遺跡を中心に—」『甲斐考古』通巻45号 山梨県考古学会
- 真田町教育委員会 1973年「真田町日向畑遺跡」
- 関東ローム研究グループ編 昭和40年「関東ローム」
- 国学院大学歴史考古学会 1984年「天神城跡」
- 信濃教育会 昭和56年「長野県の地質」
- 平賀城址保存会 昭和53年「平賀氏城跡」
- 田口昭二 1983年『美濃焼』考古学ライブラリー17 ニューサイエンス社
- 長野県文化財保護協会 1983年『塩田城—その歴史と発掘—』
- 山田瑞穂 1978年「長野県における中世山城調査の現状と問題点」『中部高地の考古学』長野県考古学会
- 源平盛衰記
- 承久記
- 畠山忠雄 「矢島の歴史」
- 佐久の武士団

浅科村文化財調査報告 第2集

矢 嶋 城 跡

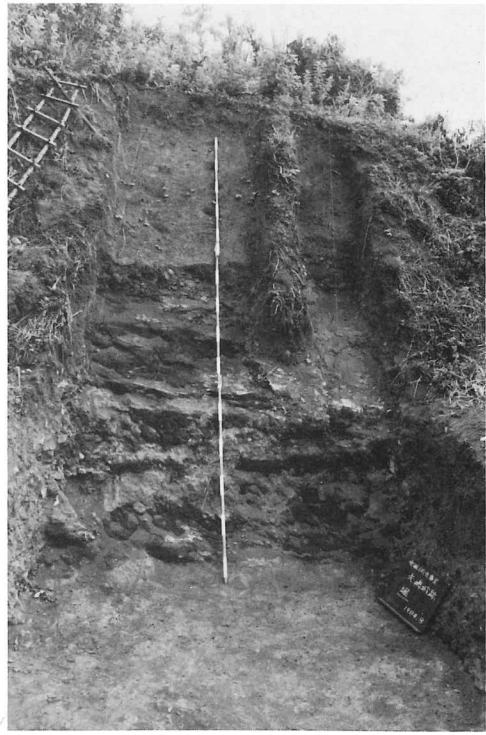
—緊急発掘調査報告書—

発行 1985年3月20日
発行者 浅科村教育委員会
印刷 ほおずき書籍株式会社



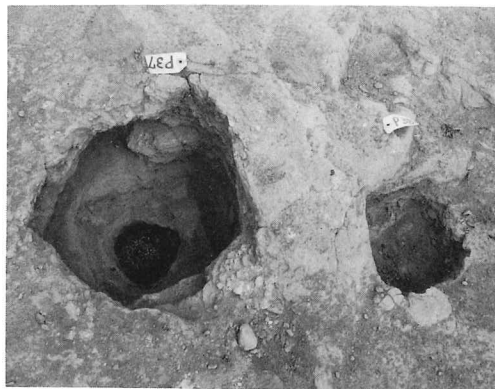
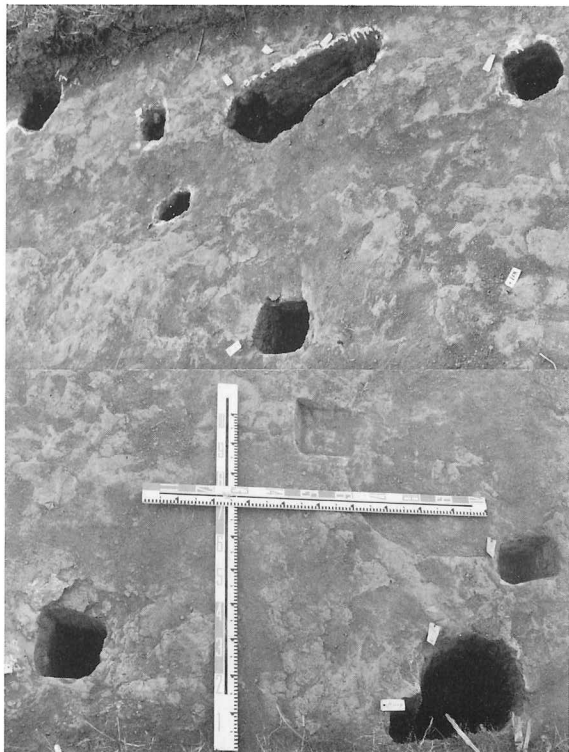


本城全景(東側から)



空掘

第三図版 矢嶋城跡柱穴図



第四図版 矢嶋城跡出土遺物

